

日本の近代看護教育草創期の教育観を探る

呉大学看護学部

津 田 右 子

論文要旨 日本の近代的な看護教育は、ナイチンゲールによって発展させられた一つの専門職として職業化された近代看護が日本に導入され、いわゆる Trained Nurse（正式な看護婦）としての誕生をみた時を出発点としている。これは西洋看護教育（ナイチンゲール方式）の導入と言うことも出来る。そして、草創期とは、このような看護婦養成が開始された明治18年を基点に、主に明治20年代をさしている。ここでは、1. 有志共立東京病院看護婦教育所、2. 京都看病婦学校、3. 桜井女学校付属看護婦養成所、4. 帝国大学付属看病法練習科、5. 日本赤十字社看護婦養成所、6. 聖路加病院附属高等看護婦養成所の6校を対象にとりあげ、近代看護教育の草創期に関わった人々の資料や当時の卒業生の声を集めて、その教育観をまとめた。

キーワード：Trained Nurse、西洋看護教育、外国人教師

■ はじめに

本論は近代看護教育史の研究を行い、草創期の教育観を分析し、考察しようと試みたものである。近代的な看護教育は、後述のように看護婦養成が開始された明治18（1885）年を基点に明治20年代を草創期としている。それ以降115年の歴史をもっている。

この時代の看護婦養成の目的にはまだ教育という言葉は使われていない。看護婦になるための技術を身に付ける講習や養成が主であった。現在の教育に比べればレベルは低かったであろう。しかし、明治といえ、日本の公教育が始まって間もないときである。教育は激動していた。そのような中で当時の看護婦養成に関わった人々はどういう看護教育をめざしていたのだろうか。

ここでは、近代看護教育の始まりとして、6校を研究対象にとりあげた¹⁾。このうち2校は明治39年に閉鎖となったが、4校は現代まで継続して看護大学となり、日本の看護教育の中心を担っている。この6校について、その教育に関わった人々

の資料や、当時の卒業生の声を集めて、分析、考察し、近代看護教育の草創期の教育観をまとめた。

■ 研究方法

近代看護教育の出発点として土曜会歴史部会著『日本近代の夜明け』で提唱する5施設—①有志共立東京病院看護婦教育所、②京都看病婦学校、③桜井女学校付属看護婦養成所、④帝国大学医科大学付属看病法練習科・講習科、⑤日本赤十字社看護婦養成所、と他に聖路加病院附属高等看護婦養成所をとらあげた。聖路加は、私立の看護婦養成所の中で初の看護大学となっていて、他の養成施設と比べると遅く、明治37（1904）年に看護婦養成を開始し現在に至っている。以上の6施設の資料から、設立者の理念、実際に教育を担当した者の指導理念、及び卒業生の声を文献調査し、分析し、当時の教育観を導きだし考察する。特に土曜会歴史部会著『日本近代の夜明け』と亀山美知子著『近代日本看護史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』を中心として、資料を作成した。

つだ ゆうこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

■ 日本における近代看護教育の導入と草創期

1. 近代看護教育とは

近代的看護教育という場合、従来の日本の事情による徒弟制度的発想と異なる系統的、組織的教育と訓練の実施を意味し、欧米的な形態の導入されたものによるといえる¹⁾。この欧米流の形態の導入ということは、ナイチンゲールによって発展させられた、一つの専門職として職業化された近代看護が、日本に導入され、いわゆる Trained Nurse（正式な看護婦）としての誕生をみた時を出発点としている²⁾。ナイチンゲール方式と言うことも出来る。ナイチンゲール方式とは、①宗教団体からの指示はうけないで、思想的に自由であり、医師と密接な連絡をとりながら、科学的、合理的な看護教育をする、②病院や医師に隷属しないで、経済的独立をかちとる、すなわち、教育期間中は労働力の対象とされない、③看護婦出身の能力ある指導者に直接の監督指導をゆだね、専門職としての確立を図る、④患者にとって何が優先するかを冷静にみきわめ、その遂行のためには容易な妥協を認めない精神的自立＝主体性と誇りをもたせる、とされる³⁾。

2. 看護婦養成開始と草創期

日本の近代看護を導入した最初の指導者は、イギリスでナイチンゲール看護学校を見学して帰国した慈恵病院医師の高木兼寛と、アメリカの事情に明るい同志社英学校及び同志社病院の創設者日本人宣教師新島襄と、女子の職業教育に深い関心をもった桜井女学校の経営者アメリカ宣教師ツルー婦人の3人であった⁴⁾。それぞれ、看護婦養成の開始時期は、慈恵病院の有志共立東京病院看護婦教育所が明治17（1884）年10月、同志社病院の京都看病婦学校が明治19（1886）年4月、桜井女学校のキリスト看護婦養成所が明治19（1886）年11月であった。その後、帝大病院の帝国大学付属看病法講習科が明治21（1888）年2月、日本赤十字社の養成は明治23（1890）年4月である⁵⁾。鈴木俊作は以上の5つの養成所を、明治20年前後の看護婦養成としてまとめ、草創期としている⁶⁾。

本論文では、これらの5校の他に、明治37（1904）年に設立された聖路加病院付属高等看護婦養成所を取りあげた。聖路加は、私立で初めて大学教育をはじめたからである。それは、慈恵や日本赤十字よりも早い時期であった。亀井は近代日本看護

史として、聖路加の設立をその範疇にいれている⁷⁾。

■ 草創期の各看護婦養成所の教育状況

1. 有志共立東京病院看護婦教育所と高木兼寛医師¹⁾

有志共立東京病院看護婦教育所は明治17（1884）年10月に創立された。創立者は海軍少医監、高木兼寛である。彼は27歳の時に、イギリスのセント・トーマス病院医学校に留学していた。その頃、ナイチンゲール看護婦学校は、もっとも充実した教育を実践していた時期であった。高木兼寛はナイチンゲール看護婦学校を視察している。彼はセント・トーマス病院の看護婦学校のナイチンゲールによる厳しい校則を取り入れた。その教育方針と、看護養成指導者のミス・リードの指導が大きな教育的影響を及ぼしたことは事実である。このことがわが国にナイチンゲール式看護婦教育を導入したきっかけになった。

ナイチンゲール看護婦学校の特色は、病院の経営と切り離され、その支配下にないことであった。宗教とも個人の主義とも関係なしに教育が行われ、近代的職業として、訓練された看護婦を誕生させたといわれている。また、すぐれた人格と能力を備えた女性の育成をめざして創設された。

高木兼寛は民間における初めての施療病院として、有志共立東京病院を創立したが、明治16（1883）年、金6千円の下賜を受けた。総長が有栖川宮になった。このときから、有栖川宮家との関係が始まる。明治20（1887）年に皇室の要望により名称を東京慈恵病院と改めた。このことは、ナイチンゲール看護学校の特色の一つである宗教とも個人の主義とも関係なしという主旨から外れたことになる。

有志共立東京病院で働いていた看病婦は、看病について教育をうけていない者がほとんどであった。婦人慈善会会員の伊藤梅子、井上武子らの6名が、看護婦養成について、高木兼寛に勧告したところ、彼は「看病婦は無教育なものばかりで到底貴重な人命を保護するには適していない。看病婦養成の必要性を痛感しつつも多額の経費を要するため、着手できないままに3年が経過した」と述べたという。

そこで、明治18（1885）年に、この6人が資金を集めるために「看護婦教育所設立の主旨」を婦

人慈善会会員に発表し、資金を集め、看護婦教育所設立に着手するようにと寄贈した。この6人の中に、我が国最初の女子留学生で、ニュー・ヘボン病院の看護婦コースで学んだ、大山捨松²⁾がいた。彼女は特に積極的な提案者であったと考えられる。高木兼寛にできなかった資金集めが、女性たちの努力により行われ看護婦教習所が実現した。

明治17(1884)年、米国人ミス・リード(M. E. Reade)を招いて、2年間、明治20(1887)年2月まで、看護法を教授させることにした。彼女はアメリカン・プリズビテリアン・チャーチ(東京第一長老教会)に所属していた宣教師看護婦で、明治14(1881)年に来日していた。高木がヘボンという医師から紹介してもらった。ヘボンはアメリカン・プリズビテリアン・チャーチの伝道医師であった。リードはアメリカでナイチンゲール看護婦教育を受けていた。明治18(1885)年1月には次のような契約をしている³⁾。

「明治18(1885)年1月7日ーアメリカ合衆国「プレスビテリアン・チャーチ」ノ「ジャパンミッション」ナル「ミス・エム・イー・リード」ト契約ス。(1)リード氏ハ二ヶ年間無給ニテ有志共立東京病院ニ勤務スベシ。其職務ハ病院ノ規則ニ制定スル者ニ従フ但シ服務時間ハ一日4時間ヲ超過セザルベシ。(2)リード氏ハ院内何レノ部ニ立入ルモ妨ゲナカルベシ。(3)下婢ニ名室ニツ生活用緒雑費ヲ共ス。(4)リード氏ハ他ノ職務ニ差シ支ヘアラザル時ハ耶蘇宗ニ関スル事ヲ教訓スル事ヲ許ス。」

ここでは、耶蘇宗ニ関スル事教訓スル事ヲ許ス、とあり、看護教育とともに、キリスト教の宣教が許された。この宣教の実際については以下の様であった。

大関和子が教育所第1回卒業生について、「院長高木師の精神とリード師の固き信仰と、明治21年2月を以て卒業授与の盛典を挙行せられ神と人との前に於いて我が国看病婦の栄冠を受けられぬ」⁴⁾と述べている。又、創立間もない頃の卒業生の中には熱心なキリスト教信者が少なくなかったことも、リードの影響である。高木自身は仏教徒であったが、生徒がキリスト教を選ぶことを自由にさせていた。

明治19(1886)年、高木は皇后陛下を本院の総長にすることを、伊藤梅子らの「婦人慈善会」に依頼し、伊藤らはそれを了解した。そこで、「東京慈善医院と称したいこと、慈善会を病院付属と

すること、御手許金を御下賜されたいことなどをすべて御嘉納になった」⁵⁾これは、明治20(1887)年1月の事であり、リードは同年翌月の2月に任務を終え帰国している。ここにおいて、有志共立東京病院看護婦教育所は、最初はナイチンゲール方式でキリスト教の影響のある教育をおこなっていたが、2年後には病院が皇后陛下を総長にすることにより、キリスト教の精神は衰え、婦人慈善会が病院付属になったことで看護婦教育も病院付属となり、教育の独立性を失った。

リードが帰国後は、医師と教育所の卒業生によって看護婦教育が続けられた。高木はただ単に学科を講義するだけでなく、看護婦とはどのような職業であるか、看護婦として備えるべきことはなんであるのか、ということをつたえつた生徒に話し、看護婦としての職業観と品位についても説いた。

たとえば、卒業生金子なお(明治30・1897年入学)は「先生のお話を伺っていると、看護法は勿論ながら、何かしら看護婦として、修養になる貴いお言葉に接するのであった。たとえば『夫汝の選びたる職業看護は、安全一身を立つるに足る。励まざるべけんや』というのがごとく、講義の都度、私達の心の支えになることを、申された⁶⁾。」と述べている。高木兼寛は職業看護婦としての自覚を高めようと、その精神を講義したのであろう。

歴代の慈恵の教育所長が看護婦に期待していたものは、単に慈恵医院においてのみでなく、広く日本の社会に対して、よい看護を提供することのできる看護婦であった。

しかし、実際の高木が看護婦に求める期待は大きく、行儀作法のしつけも厳格をきわめ、履物の脱ぎ方までに、およんだ。高木の意のあるところを本当に深く受け止めた者は少ないといわれる⁷⁾。金子なおはそれを受け止めた数少ないひとりであった。

その他、当時、慈恵の看護婦を志した人々の話をきくと、慈恵の看護婦は特別で寄貴婦人達のそばに行く機会や、留学の幸運にも恵まれることが大変魅力であったという。それは正規の留学というより、外交官や、貿易商家庭の一員、すなわちHome Nurseとして、出かけることもさしていた。したがって、慈恵の看護婦生徒には、行儀、作法、言葉使いのしつけがきびしく、「慈恵ことば」が評判となるくらいであった。

しかし、慈恵は当時の華族、大官、富豪などの上流階級の家庭看護に病院から派遣されていた

ことから、特権層の家庭看護と結びついて、看護教育がされていたという特徴もある。

又、卒業生の保良せき（31回生）は同窓会創立の挨拶で「故院長殿の素地を貫徹するために、ナイチンゲール嬢の足跡を踏むために、職業看護婦の位置を獲得するために、恵和会会員に与えられたその使命をみんなが考へつづけたいのである。」⁸⁾と述べている。この言葉から、慈恵が教育の素地をナイチンゲールに求めていること、慈恵が日本において初めてナイチンゲール式の教育を始めたことに、誇りをもっていることが伺われる。

教育目的は、看護婦教育所設立之主旨には、「有志共立東京病院ニ於テ看護婦教育所ヲ設立シ、看護婦ヲ教育シテ弘ク内外患者ノ需メニ応セントスル」⁹⁾とある。院内のみならず、家庭で療養している患者の看護ができる看護婦の養成を目的としていた。看護婦に必要な要素は、知識と技術を持ち、病人の身になって看護ができ、正しい作法を身につけ、謙遜・辞讓・温和であることであった。

2. 京都看病婦学校と新島譲¹⁾²⁾

創設者は同志社³⁾社長の新島譲と宣教医ジョン・シー・ベリーであった。そして、アメリカからベリーによって招かれたリンダ・リチャーズが指導にあたった。学校の創設は明治19（1886）年11月のことであった。入学者5人であったが明治21年の卒業時には4人となった。一人は肺疾患のため卒業できなかった⁴⁾。教育精神は「与うるは受くるよりも幸いなり」のキリスト教精神であったが、新島は「看護教育はキリスト教精神による博愛のための事業であり、キリスト教普及のためのものではない」⁵⁾としている。ベリーも看護と宗教を分離するという考えがあった。

なぜ京都にして同志社の名を使わなかったかについては、京都市在住の416人が筆頭となり、その創設資金を提供し京都に土地を求めたため、地域の人々に結ばれたほうが良いという新島の考えがあったからである。

新島はまず新しい病院と看護学校を創設して、基礎を作り、徐々に医学校におよぼしていこうとしていた。医学校に先んじて、看護学校をつくるというこの考えはベリーの意見に従ったといわれる。当時の看護教育が医師の手に委ねられていた時代に、斬新な考えであったと思う。これは、あくまで教育が中心であって、病院はその実習所として考えられていた。ミッション以外の多くの看

護婦養成所が看護婦の教育より病院経営の方がとかく優先して、全員貸与制度の上に、看護婦生徒の無償労働力が引き当てにされていることと対照的である。「勤労の場所ヲ択フコトハ各自の勝手」⁶⁾であり、卒業後の拘束をしなかった。また、少数の生徒しか入学させず、入学後もどんどん淘汰していくやり方は、量より質を、教育そのものを重んじたといえる。

しかし、新島は思いがけなく明治23（1890）年1月に早世し、4年間しか関わらなかったことが、この看護学校の存続が今日に至らなかった大きな理由となった。没後7年後に同志社内に、内紛が起こったのである。その上、ベリーは6年目に院長を解任され、リチャーズは4年半で病氣帰国となったことも、その大きな要因であろう。このほか、慈恵や日赤が皇室や軍部の庇護をうけていたのに比べて、同志社は援助資金が不足し困窮したため看護教育を中止せざるを得なかった。同志社が看病婦学校と病院を閉鎖して売却しようとした為、学校の同窓会が対立し決起したが、結局、学校は明治39（1906）年3月で終止符をうった⁷⁾。看護教育の活動期間は20年であった。（校長だった佐伯理一郎は同年4月に学校を佐伯病院内に移転させた。京都看病婦学校50年史では実習病院が佐伯病院と京都産院にかわっても、存続しているとして、活動を50年としているが、土曜会歴史部会も亀井美知子も、明治39（1906）年の佐伯病院移転が、同志社と無縁になった時としている）この20年間の卒業生は156人で、毎年10人程度の卒業生であった。

この学校は、当時最高の看護教育が実施されたと言われている。それは何故だろうか。その要因は、ベリー院長の、看護教育に対する考え方が、当時の医師と違っていたということだった。それは、看護婦は医師の思うように、医師の手によってのみ教育されるべきもので、それが必要以上の学問をさせると、むしろ使いにくくて困るものであるという通念を破ったことである。

解剖・生理・病理は医師でよいが、看護学はすべて指導能力のある看護婦自身の手によだねるべきであると強調し、特に学校の建築とカリキュラムの編成は、最初からその指導者の意見を聞くべきであると、Trained Nurseを、自立性をもった専門職と認めた卓見である。

さらに、彼が先進的な治療を行なっても、看護婦の無知のために、治療効果を台無しにするよう

な経験をしたことから、教育をうけた看護婦の必要性を痛感していた。

そして、彼はアメリカのフィラデルフィアで資金集めに奔走し、当時アメリカにおける看護婦教育の第一人者であったボストン市立病院婦長兼看護婦学校長リンド・リチャーズを、はやくも明治19（1886）年1月に来日させている。彼女はナイチンゲール学校の出身ではなく、宗教的なカイザース＝ヴェルス（ナイチンゲールも看護婦の修行をした施設）の影響をうけた、ニューイングランド病院（アメリカで最初に正規看護婦教育を実施した病院）の出身で、アメリカの最初の看護婦になった人物である。彼女自身はイギリスに留学した明治10（1877）年、36歳の時にナイチンゲール（当時58歳）を訪問し、貴重な体験であったことを自伝に残している。看護に対する識見を持っていた人物であった。

リチャーズは日本に近代看護の種をまくために、わざわざ学校長の要職を自ら退いて、一人のキリスト教徒として来日した。明治21（1888）年、第一回卒業式はアメリカの学校のやり方と同じ方法で行われた。この卒業式でリチャーズは、「日本の婦人たちを従来の完全な服従の生活から、永久に脱出させて、進歩と自己発展の環境に送り込む第1歩となったと確信した」⁸⁾

彼女の帰国後も数名のアメリカ人看護婦による指導を続けた。京都看病婦学校の教育水準の高さは、優秀な卒業生の活躍もあって、人々に認められた。政府をはじめ、あちこちの施設が視察に来るようになった。卒業生の活躍をみると、いずれも看護技術の背後に潜む、すぐれた人格の存在を思わせるもので、現代の看護教育にひとつの問題を投げかけている⁹⁾。その指導精神を知る手立てとして、看病婦学校の「訓言」の一部を記す¹⁰⁾。

この訓言はいつ決められたのかははっきりしない。21項目からなる。

- ◇同情は心の奥に陰蔽せられる真正の愛の顕表たるなり。
- ◇病室は事情の許す限り愉快なる楽園たらしむべし。
- ◇善く聞き確実に答え迅速に判決せよ。
- ◇善良なる看護人とは常に技術学芸の秀才なるものをいうにあらずして患者のために計る処の同情の心を養いし人をばいうなり。
- ◇緻密なることは看護婦として養うべき唯一の品格なり。

◇慈善は心の功德にして手の功德にあらず。

◇人生は概して泡沫の如し、然れども其の内に石の如きもの2個あり即ち一は己自身の勇気一は他人の困難に対する親切是なり。等

3. 桜井女学校付属看護婦養成所と創立者ツルー¹⁾²⁾

桜井女学校は東京の女子学院の前身である。明治9（1876）年桜井ちか³⁾により設立された。彼女の苗字から桜井女学校と名つけられた。この時はまだ看護婦養成はされていない。桜井ちかが去ってから、明治19（1886）年に、後任の婦人宣教師ツルー校長⁴⁾により看護婦養成が開始された。桜井女学校という名称はそのまま継続しているが、桜井ちかは看護婦養成には全く関わっていない。看護婦養成の発想と創立はミッション管理に移されてからのもので、ツルーの考えであった。

しかし桜井女学校は、日本人の手による最初のキリスト教主義の女学校であった。桜井ちかは我が国の代表的な女子教育家である。札幌の北星女学校、大阪の一致英和女学校の設立に力を貸した。明治12（1879）年ころになると、桜井女学校は経営難になった。その上、彼女は夫と共に北海道に行くことになり、桜井女学校を継続することが出来ない状況になった。そのため、彼女が所属していたフィラデルフィア・プレスビテリアン婦人伝道局ミッション（米国長老教会フィラデルフィア婦人伝道局・日本基督教会）が引き継ぐことになり、明治13（1880）年には麴町中6番町28番地に新校舎をたてて移転した。この時の校長が婦人宣教師ツルーであった。

桜井女学校は明治22（1889）年には新栄女学校⁵⁾と合併し、上二番町に立派な校舎を建て、女子学院の名称に変わった。付属の看護婦養成所は、この頃には一時養成を中断し、明治31年に淀橋衛生園内に移転し、明治39（1906）年に閉校となっている。

ツルーは校長であったが、表面上は矢嶋輯子（ヤジマカジコ）を校長にしていた。外国人が財産を所得することは認められていなかったからである。ツルーは自分が以前にいた新栄女学校の教諭の矢嶋を校長にむかえ、ミッションからの多額の助成を仰ぐことにも成功した。ツルーは生徒達に、学問も大切だが、デモクラチック（democratic）な生活を覚えることが大切だと教えていたという。キリスト教の女子教育は、士族の階級の女性たちに強調され続けた儒教思想による従属

的立場、役割を分担させることのみを目的とした教育とは対照的に、女性に精神的・社会的な自立を教えた。

桜井ちかは北海道に去ったが、ツルーが校長になってからの桜井女学校は非常に発展し、明治13年には東京では最初の私立幼稚園を開設している。そのツルーが看護婦養成を始めた動機は二つある。一つは横浜にいたアメリカ人宣教師のジョン・バラの妻が病院に入院したが、看護婦がいなかった。そこで、女学校をつくることも大切だが、看護婦の養成も重要だと考えた。その後アメリカに帰り資金集めを始めた。しかし、遊説の途中で急逝した。丁度、休養のために帰国していたツルー婦人はその話をきいて、バラ婦人のもとへかけつけ、寄付金を預かり、意思を継ぐ決心をした(明治16～17年頃)。同志社のベリー医師も同じころ、フィラデルフィアで募金活動をしたが、アメリカ会衆派教会(日本組合教会)に属していたため、直接の交流はなかった。

二つ目は看護婦という職業が、キリストの愛を実践するのにふさわしく、伝道に役立つと同時に、看護婦の養成は第一級の職業婦人を育てるということがあった。看護婦教育開始にあたって、ツルーはアメリカから女医のライトを招く予定であったが、遅れた。ライトが来日した時期は不明である。そこで、「看護法(英語)」(看護婦心得ともいわれる)を田村ゑいが翻訳して、看護婦生徒たちに話すことになった。これは内科実習の本であった。すでに、有志共立東京病院が近代看護教育を実施していたが、日本ではまったく知られていなかったため、田村も苦心した。イルリガートルとか、浣腸とか、便器の使い方など、説明はできるが、実際に何をどのようにするのかわからず、本当に困ったと本人も述べている⁶⁾。教育内容については詳しくわからないが、解剖・生理、看護法、英語を原書でならったという⁷⁾。

生徒たちは8名いたらしいが、卒業したのは、6名だった⁸⁾。皆キリスト教に関心が高かった。1年の学課を終了後、明治20(1887)年11月から、帝国大学(現東大)医科大学第一医院(以後帝大と略す)での実習に入った。実際の指導者はアグネス・ヴェッチ(Agnes Vetch)というナイチンゲール看護学校の出身のイギリス人である。彼女は当時45歳であった。日本観光目的のため桜井女学校のリンセ方に寄宿したのを、ツルーが桜井女学校生徒への指導を懇願し帝大に紹介したようで

あるがその経緯はよくわからない。ツルーは日本で最大の病院で実習について大変な便宜を与えられたと書き残しているがはっきりしない。

明治20(1887)年10月にヴェッチが帝国大学医科大学に招聘されたのは、桜井女学校ですでに1年間の講義中心の課程が修了した時点であり、実習場の必要性に迫られたときであった。医科大学側が看護婦養成に着手しようとしていたことは双方にとって好機であった。しかし、両者間でどのような交渉の経緯があったかは不明である⁹⁾。官立の帝国大学医科大学第一医院がキリスト教主義の私学桜井女学校の病院実習を受け容れるのは容易な時代ではなかったと考えられる。その経緯がはっきりしないのは残念であった。その後、卒業生の大関和、鈴木雅、桜川が看病婦取締で帝国大学に就任している。

明治20(1887)年10月27日からヴェッチによる「看護法講義及看病術実地練習」が帝国大学で始まった。桜井女学校の生徒6人はここへ入学してからは「看病婦見習生」と呼ばれた。同年11月に帝大は「帝国大学医科大学看病婦見習規則」を作っている。その中で、看病婦見習生は授業料を払い講義を受け実習することが明記されている。ナイチンゲール看護婦養成学校では看護婦監督者の教育を受けるために授業料を払っている。

当時の帝国大学医科大学第一医院は戊辰戦争中に設けられた大病院を前身としており、その当時から、組織だった教育のない放置されたままの看病人(女)が働いていた。彼女達を「従来看護婦¹⁰⁾」という。ヴェッチは、桜井女学校の生徒の実習を引き受けてもらうことを条件に、帝国大学医科大学第一医院における従来看護婦教育(看病婦・付添看病婦の訓練)のための委嘱を了承したようである。当時の東京大学では女性教師を雇うことは稀なことであった。「看護法講義及看病術実地練習」では、桜井の看病婦見習生と帝大の従来看護婦たちが看病婦・付添看病婦になる訓練が同時に行われた。このことについては、次章でも引き続き述べる。

ヴェッチが看護教育をどのように考えていたのかは、資料がないため、さだかではない。しかし、ヴェッチを囲んだ6人の卒業写真(資料I)をみると、黒い洋装に白いエプロンに白いキャップをかぶっている様子から、ヴェッチが出身看護学校と同様の教育を日本でも行おうとしていた熱意を感じる。しかし、在日が一年間というのは、あま



資料1 桜井女学校看護婦養成所Ⅰ期生の卒業記念写真
(明治21年) 前列中央がヴェッチ

土曜会歴史部会著 『日本近代看護の夜明け』 p.72 医学書院
2000から引用

りにも短く、西洋式の看護教育が根をおろすことは難しかった。

60～70人ばかりいた従来看護婦たちは、熱がでたら、氷枕をあてる、患者が苦しめたら、先生のところへ飛んでいくことぐらいしかできない心細いものであった。生徒の大関和によると、従来看護婦は一樣に「鬼の様」であり、患者の扱いはひどいものであった¹¹⁾。外人教師直伝の新知識を持った看護婦が現れたため、医師や看護婦は生徒たちのことを、余計な邪魔者がきてうるさいといわぬばかりに冷たく扱った。だが、患者達は愛を以て慰め、献身犠牲の決心で看護する生徒達に対し、天使が天下ったかとばかりに、喜んでいた。しかし、医局からは看護と伝道を混在してはいけないと注意を受けていたこともある¹²⁾。

明治21(1888)年10月25日に卒業試験が行われた。試験官は帝国大学医師で、内科学が三浦謹之助、外科学が芳賀栄次郎、看護法実地がヴェッチであった。桜井女学校6名(看病婦見習)、帝国大学医科大学第一医院22名(看病婦15名・付添看病婦7名)、計28名に三浦・芳賀・ヴェッチの署名入りの講習終了証明書が帝国大学から与えられた。ヴェッチの通訳であった鈴木まさにはヴェッチの推薦文が書かれた終了証書が渡された。第1回卒業式は桜井女学校内ではなく、院長が証明書を手渡すという帝国大学医科大学あげての盛大な催しとなった。卒業式の直後、ヴェッチは帝国大学との契約期間が終了し、帰国している。帝国大学医科大学の第2回卒業式に桜井女学校の生徒はいな

かった。桜井女学校の帝国大学での実習は明治22(1889)年に第2回生(4人)が帝国大学看病法講習科の生徒と一緒にいったのが最後となった。その後の実習場所については、はっきりしない。

このように、第1回の優秀な数人の卒業生を出して当時の看護界をリードしながらも、看護婦養成が低迷した。ミッションからの経済的支援が不足してきたからである。ミッションは、看護婦養成よりも本来の活動目的であるキリスト教の伝道へ、資金を多く出したいという意向があった。女医ライトは実習病院がないと看護婦の養成が難しい、とミッションに伝えている。看護婦養成は第2回の入学までは明確であるが、それ以降は閉鎖されたのかと思うほど、少なくなった。ツルーの没した2年後、明治31(1898)年「赤坂病院分院衛生園」に看護婦養成所を桜井女学校から移した¹³⁾。実質の閉鎖は明治39(1906)年である。桜井女学校開校期間は20年間もあるのに、卒業生は20名という少なさである。桜井女学校は同志社と同じ年に閉鎖しており、これはミッションからの資金援助の打ち切りと考えられる。力を失った桜井女学校は、明治23(1890)年新栄女学校と合併し、女子学院と名称を変更し、現在に続いている¹⁴⁾。

桜井女学校の看護婦養成の開始にあたり、独自の実習病院を持っていないため、帝国大学医科大学で実地訓練をしたことは、本研究にとりあげた他の養成施設がすべて実習病院を持っていたことに比べて、大きな特徴である。しかも、帝国大学医科大学での看護婦養成開始時期と重なっていた。この時期の経過を年表Ⅰに記す。

4. 初めての官立看護教育－帝国大学医科大学看護婦養成

鈴木一子(元東京大学附属病院看護部長)によると官立の大学病院での近代看護教育は東大(東京大学)で最初に開始したとのことである¹⁾。帝国大学医科大学付属看病法講習科(1年コース)が正式に設置されたのは、明治22(1889)年4月となっているが、実際はそれまでに2回の看護婦養成を行っている²⁾。その始まりは、明治21(1888)年2月であった。(資料2)講習科開始前に実施された第1回の養成は明治20(1887)年10月に桜井女学校の看病婦見習生を「看護法講義及看病術実地練習」(看病婦練習科とも言う)に入学させてから、4ヶ月遅れて開始した。これは

明治20(1887)年11月の看病婦見習規則制定後1ヶ月後であった。これが帝大(帝国大学医科大学の略)の初めての看護婦養成であり、医科大学第1医院看護婦養成開始である。(資料 表1)

桜井女学校の項にあるように、ツルー婦人の紹介で、アグネス・ヴェッチを初めて委嘱として雇った。当時の帝国大学では女性教師を雇うことは稀なことであった。ヴェッチは明治22年の国会議員より高い給与で雇われた。ヴェッチは招かれたのではなく医科大学の段階で急遽教師として雇われた³⁾。同時に桜井女学校で1年近い看護学習をすませた1期生6人を、実習生(看病婦見習生)として、帝大が受け入れたことは前述の通りである。ヴェッチが行った講義の内容は不明である。具体的に病院内でどのように実地練習を指導したのかわからない。帝大の講習生は桜井女学校の実習生と比べて、程度が低かった。桜井女学校の生徒が看病婦見習生の許可証を授与される時に、帝大はこの講習生の中で卒業試験に合格した22名に、看病婦と付添看護婦の名称を与えた。

アグネス・ヴェッチの帰国後も、桜井女学校第1回の卒業生の鈴木まさと大関和、桜川里いの3人が、帝大病院の婦長として、残った。彼女たちと医師二人が中心となり、第2回看病婦・付添看護婦の実習訓練(5ヶ月講習)を行った。しかし、

鈴木と大関の二人は2年後には辞めている。

帝大病院は医学生の実習講義のために患者を収容するようになってから、いっそう必要にせまられて、なんの訓練もない婦人を看病婦として、多数採用するようになった。帝大病院の最初は、戊辰戦争時、横浜に設けられた軍陣病院が、やがて「大病院」になったもので、開設当初の院長格であったイギリス人医師ウィリアムが、女の看病婦採用を公に唱えた最初の人であった。それまでは、男が看病婦であった。

大関が辞めた明治23(1890)年10月直後、帝大病院では、同年11月28日、看病法講習を望む看病婦に、試験の上、聴講を許可し、成績の良いものには卒業証書を授与することにした⁴⁾。

明治25(1892)年、1年の講習科卒業後、満2年を看病婦として勤務した者に限り、はじめて正式の看病婦証明書を交付するということになり、大きな前進であった。それでも、慈恵、同志社、日赤の養成に比べると、病院自体は権威があったものの、看護教育は正式でなく、他に比べて遅れていた。そこで、明治30(1897)年に、管理者(婦長)養成を目指した高等看病婦講習科が設立されたが、1回生で中止となった。経費の問題と各科の婦長が充足したためである。

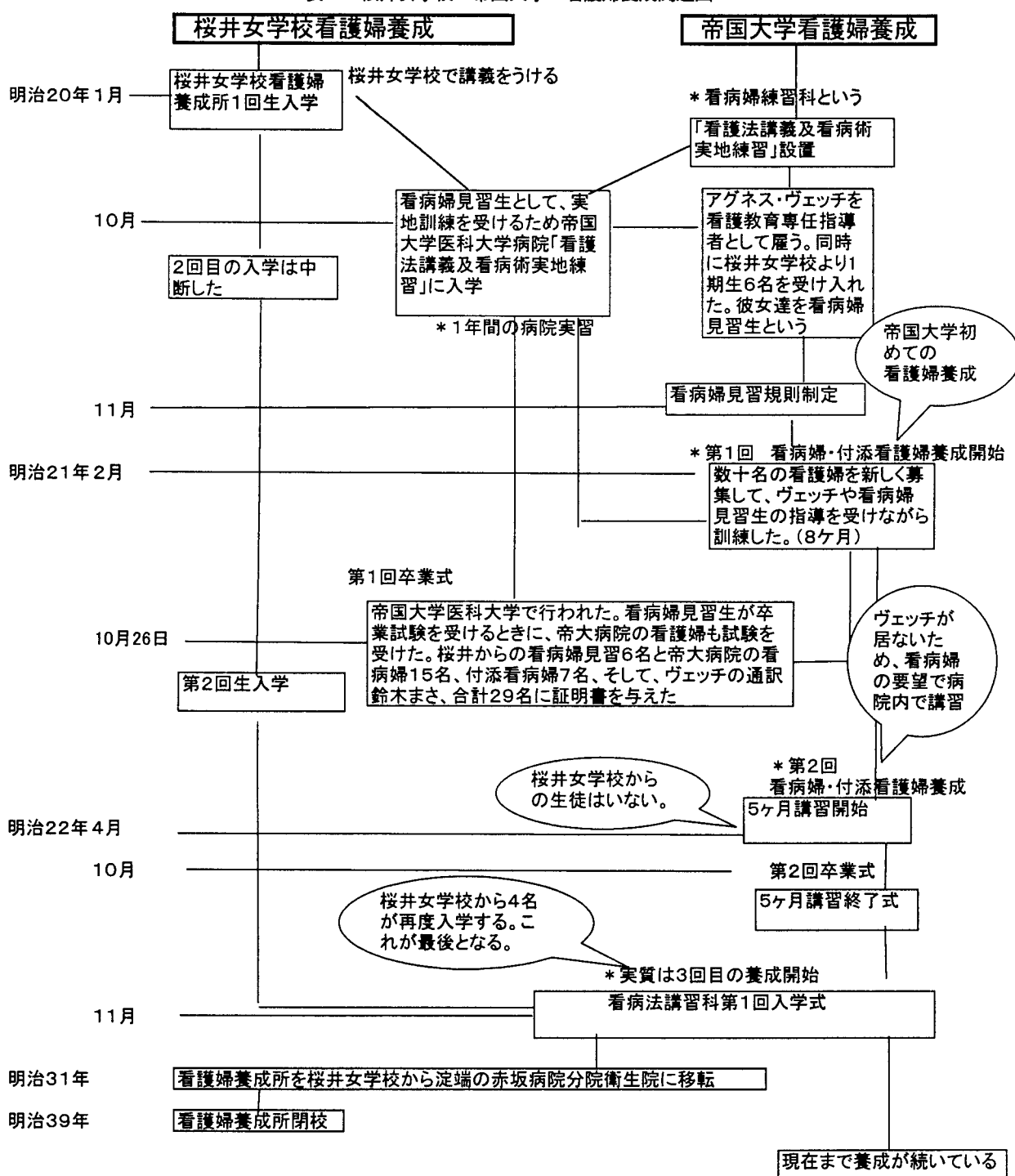
しかし、明治42(1909)年には「看病婦見習規則

表1 帝国大学の看護婦養成開始時の年表

帝国大学の看護婦養成				他の看護婦養成		社会情勢	
規則	名称	年号	入学・卒業	内容	年号	施設名	内容
					明治18年10月	有志共立東京病院看護教育所設立	
看病婦見習規則 明治20年11月	看護婦練習科 (看護法講義及看護術実地練習の実施)	明治20年10月	第1回入学	アグネス・ヴェッチを桜井女学校のツルーの紹介で看護教育専任指導者として雇い、同時に桜井女学校より1期生6名(桜井で1年近い看護学習をすませている)を付属病院の実習生として受け入れた。彼女達は看病婦見習生といわれた。	明治20年1月	桜井女学校看護科1回生入学	
		明治21年2月		数十名の看護婦を新しく募集して、ヴェッチや看病婦見習生の指導を受けながら訓練した。(8ヶ月)	明治20年11月	京都看護婦学校開校	
		明治21年10月25日		看病婦見習生が1年の実習を終えて卒業試験を受ける時に、帝大病院の看護婦も試験を受けた。桜井からの看病婦見習生6名と帝大病院の看護婦15名、付添看護婦7名、そして、ヴェッチの通訳鈴木まさ、合計29名に証明書を与えた。			
		明治21年10月26日	第1回卒業	第1回卒業式(看護法講習証明書授与式(看護法講義及看護術実地練習終了式))			
		明治22年4月	第2回入学	5ヶ月講習開始			明治22年2月 大日本帝国憲法発布
		明治22年10月11日	第2回卒業	同上修了式(第2回卒業式)26名看護婦が証明を受けた。桜井からの卒業生はいない。			
	看護法講習科	明治22年11月	第1回入学	1年コースで開始。桜井の看護婦見習生4名を再び付属病院の実習生として受け入れた。			
		明治23年12月	第2回入学		明治23年4月	日赤看護婦養成開始	明治23年10月 教育勅語発布
看護法講習規則 明治24年		明治24年11月	第3回入学				

参考資料『看護教育百八年のあゆみ』東京大学医学部附属看護学校編集 平成7年発行

表2 桜井女学校と帝国大学の看護婦養成関連図



* この表は『看護教育百八年のあゆみ』東京大学附属看護学校編纂 平成7年発行を参考資料にして、筆者がまとめたものである。

則」を「看護法講習規則」と改称し、地方大学病院看護婦養成所のモデルとなるように、画期的改善を行っている。

このような帝大の看護教育であるが、教育者は常に医師であった。碧川かたは明治28年ころ、講習科に入学した。その時の養成期間は2年であった。彼女はその時期、「生徒のあいだは昼に患者

の付き添いをし、夜間の教育でしたが、医学生たちが昼間学ぶ教室に、同じ教授方による勉強でした⁵⁾と述べている。少し時代が後になるが、明治43(1910)年に入学した甲あさえによると、「前期の一年半は午前中が実習で、午後は2時から5時まで医局長クラスの医師によって、教育された⁶⁾とある。

婦長養成コースを明治32（1899）年に卒業した高野京は興味深い思い出を語っている。「当時のクラスは18人で、全国、京都、宮崎、佐賀、広島、香川、愛知、石川、群馬と全国からきていた。講師は各科（外科・内科など）の教授ばかりだった。午前中は自習時間でまったく自由行動で、植物園や上野の公園にでかけるものもあり、午後は講義でした。普通科の人は、昼間は病室のお手伝いで、午後は内科、外科の講師の講義がありました。2年目の実習の時、三浦教授は、「君達は将来患者に接することはぜったいにないのだから、看護法は熱心に覚えなくてもよろしい」と申され、注射さえ十分に練習せずにおわりました。卒業式の青山教授の訓示では“高等科養成の目的は、看護婦の品性を高め、社会的地位を向上せしむるよう指導を務むること、および病室の習慣を改善して、大学病院を模範的病院とするように心がけること”であった。」⁷⁾という内容である。

以上の状況からいえることは、帝大の看護教育の内容は看護法を教授することを目的とはせず、医師による、医学的内容の教育であったといえる。看護婦の教師は一人もいなかった。

そのため、看病といえば、病床の患者に密着していた看護の中心が、病床から離れて、医師に隷属した形で、その診療の介助に変容していったことは、官立の医育機関に付属した大学病院における看護の求め方と深く関わっている⁸⁾。ここには、看護教育の主体性が見出せない。医師が中心で看護婦はそのお手伝いをするという関係が浮かんでくる。

桜井女学校の教育は帝大にほとんど影響を与えなかったといえる。卒業生の大関らが看護婦取締りになっていたにもかかわらず、2年余りで退職したことと関係があると思われる。日本の国粋主義が帝大の教育に流れていることが、キリスト教精神に基づくナイチンゲールの看護教育の継続を途絶えさせたと考える。

5. 戦時救護と日本赤十字社看護教育のはじまり

日本赤十字社（以後日赤社という）は佐野常民が明治10（1877）年に設立した博愛社が基盤となった。博愛社とは「博愛これを仁と謂う」（韓愈『原道』）から名づけられた。スイスのアンリ・ジュナンが赤十字の創立者であるが、日本の赤十字社は、佐野の博愛社の精神が基本にあり、彼の教育観が日本の赤十字の看護教育に反映されてい

る¹⁾。佐野常民は外科医であるが佐賀海軍の創設にも尽力した。彼は文政5（1822）年に生まれた。ナイチンゲールがその3年前に、国際赤十字社の創始者アンリ・ジュナンは5年後に誕生している。佐野は佐賀に生まれ、佐賀の藩校の弘道館に入り、その後蘭学を学び、嘉永1（1848）年大阪の適々斎塾に入門した。半年間在塾だったが、彼の人生に大きな影響を与えたと言われる²⁾。

慶応3（1867）年のパリ万国博覧会に、幕府が参加したことは知られているが、この時、佐野は佐賀藩の代表として派遣されて、日本の工芸の紹介に努めた。彼は初めて西洋文明に触れて学ぶものが多かったが、特に印象に残ったのが万国博覧会会場の赤十字展示館であった。国際赤十字が1864年に発足して4年後に佐野は赤十字を知ったのである。その後、明治6（1873）年オーストリアのウィーン万国博覧会では日本政府の博覧会副総裁に任命された。この渡欧の時にも、佐野は赤十字社の展示物に関心を持ち、外国の戦時における負傷者救護の実際を聞き、ジュネーブ条約加盟国が増加したことも知った。人道的国際組織こそ文明進歩の証拠と考えた³⁾。明治10（1877）年西南戦争がおこり、田原坂で特に双方に多数の負傷者が野山に放置される状態となった。そこで佐野は敵味方なく救護する趣旨が政府に理解されないため、有栖川宮に設立願書を提出し、許可を得て、医員と男性看護人による救護を開始した。これが博愛社の始まりである。

明治19（1886）年に博愛社病院は開院した。博愛社は明治20（1887）年、日本赤十字社（以後日赤社と略す）と改称した。博愛社の中枢部では、病院創立後どのようにして救護看護婦の養成を開始するかが大きな問題であった。当時世間一般の「看護」に対する考え方は、これによって金銭をもらうなど賤業であるという見方が強かった。一方で進歩的婦人のめざす道であったが、数は少なかった。この賤業意識を払いのけて、看護婦の品性をたかめ、救護看護婦のイメージアップを図り、より優秀な人材が求められるような条件をつくりたいと考えた。そこで、皇室をはじめとした貴婦人層に呼びかけて、プロではない無給有志からなる日本赤十字社篤志看護婦人会の結成をはかることにした。皇室中心主義の我が国においては大変効果的な企画であった⁴⁾。篤志看護婦会は明治20（1887）年6月2日に発足し、毎月2回日赤社で救護活動に関する学習会をもち明治38（1905）年

まで養成された。明治21（1888）年6月21日、篤志看護婦77名（第1回生）に対して、看護法修行証書の授与式が行われた⁵⁾。しかし同年7月15日に福島県磐梯山が噴火し、死者477名という天災が起こった時、貴婦人たち77名の篤志看護婦は活躍しなかった。これは、この養成が救護活動が目的ではなく、看護のイメージ向上の目的であったためである。

日赤社において、社則に平時救護の規定がなく、この磐梯山の天災に即座に活動できない状況であった為、戦時救護に加えて、平時救護が社則に明治26（1893）年に挿入された。

宿願の看護婦養成が始まったのは、明治23（1890）年4月1日のことである。当時、世界の先進的な看護婦養成所は、ナイチンゲール方式による教育を志向していた。日赤社の橋本院長はナイチンゲールの看護教育にあるキリスト教のイメージに抵抗を感じていた為、それに逆らって、ドイツから指導者をもとめた。しかし、ドイツではカイザース＝ヴェルトをはじめとして、デアコニッセ（プロテスタントの奉仕女）による宗教看護が根深く定着していたため、これを断念した。橋本院長は、看護婦の教育は軍医の手でやろうと考えた。日赤看護婦の教育とナイチンゲールの教育の関係は無かったといえる。日赤社はむしろ、日本陸軍の教育方針に通じ、天皇に命をささげ、上官の命に絶対服従する、克己・忍耐・奉仕などが指導精神の大きな柱となっていた。

明治維新後の王政復古の中で、わが国は江戸時代にもましてキリスト教排斥に力を注いでいる。そのような社会的状況では、赤十字の十字に対して、キリスト教の十字架と関係があるかのような疑惑の念がもたれた。そこで皇室を推戴し、それを全面に出し、日赤がキリスト教と無関係であることを強調した⁶⁾。明治22（1889）年に看護婦規則20カ条が制定され、その中にある看護婦養成の主旨は「卒業後戦時ニ於テ患者ヲ看護セシムルニアリ」⁷⁾であった。明治23（1890）年4月の第1回の入学生は10人であった。その後、日赤社の全国組織を通して、委託生派遣をうけいれるようになった。日清戦争にそなえ、少しずつ増員していった。

明治2（1869）年にベルリンの赤十字国際会議で「各国赤十字社ハ看護婦ノ教育に備フルノ任アルモノトス」⁸⁾という看護婦の養成の決議事項がある。この決議事項を最も早く実行したのが、日

本赤十字であった。佐野は明治23（1890）年に看護婦の養成を開始した。佐野は若い頃から教育に関して、知育ばかり発達させても徳育が劣っては完全でないという、人間形成についての意見を持っていたため、精神教育を重視した。その精神教育は濃尾大地震明治24（1891）年の災害救助に出発する時の第1回生への訓示、1．至誠以テ救護に従事スベキ事 2．奮勉以テかん苦ニ堪ベキ事 3．節操以テ品行ヲ慎ムベキ事、に現れている。

卒業生として、荻原タケという日赤社看護婦の理想のようなひとが7期生にいた。明治40（1907）年に皇室家族の随員として推薦を受け、2年間のヨーロッパ遊学の機会を与えられ、ロンドンで第3回国際看護婦協会（ICN）に日本から初めて出席した。帰国後、4代目の監督⁹⁾の地位についた。荻原タケは後輩を指導する教育者の一人として、寛大な態度で甘やかすよりも、厳しさをもって、臨んだほうが、失敗が少ないとして、厳の態度を選びとったと後に語っている¹⁰⁾。彼女は、事にあたっては沈着冷静、心をそのまま面に表さず、細心大胆で立ち振る舞いは礼儀正しく、むだ口はきかず、人に押れず押れさせず、常に微笑みと温情をもって、公平無視に応援し、用意周到、緻密な計画性と高い事務能力を身につけるといいう日赤社が看護婦の統率者に望んだ理想像が実現されたような女性であった¹¹⁾。

6. アメリカの看護教育の水準を導入した聖路加看護教育

聖路加病院はキリスト教主義のアメリカ聖公会¹⁾所属の宣教師であり、医師であるルドルフ・B・トイスラー²⁾により設立された。明治35（1902）年2月を創立記念日としている。トイスラーは明治33（1900）年に24歳で来日した。聖路加病院は施療部を設けるなど、当初からキリスト教による博愛事業を実施することを目的にしていた。

明治35（1902）年に聖路加看護婦学校が発足した。生徒は10人ほどで、大半はクリスチャンの女性だった³⁾。明治35（1902）年に荒木イヨ婦長がアメリカでの約2年間の病院研修から帰国し、明治36（1903）年10月からは看護婦養成にあたるようになった。

明治37（1904）年、荒木イヨを中心とする、アメリカ式⁴⁾の高等看護婦養成所ができた。これが聖路加病院の看護婦養成開始である。生徒数は数名で、ミッション系の高等女学校卒業生を中心に

募集され、3年間の病院での実地訓練が義務付けられていた。この学校は正式な認可をうけたものではなく、聖路加病院が維持にあたっていた⁵⁾。

看護婦の養成を開始することになったのは、トイスラーが教養のある看護婦の必要性を痛感したからだといえる。京都看病婦学校の設立にあたって、宣教師ベリーが力説したことが、そのまま約20年後にトイスラーによって、再び唱えられるにいたった。すぐれた看護婦の協力がなければならぬといふことは、医学が発達しようとしても、不十分なものになるということが、共通して、提唱されていたことになる⁶⁾。

看護婦養成にあたった荒木イヨは、明治10（1877）年に生まれ、立教女学校を卒業した。神戸の聖公会の、ミス・スミスの教えている看護婦学校に入り、明治28（1895）年に卒業した。その後派出看護婦となり、東京にもどった。アメリカの宣教師ミス・マンの付き添い看護婦をしていて、トイスラーに出会った。ミス・マンは、荒木いよをアメリカの一級の病院に入れて、研究と養成のコースをうけさせたいと考えていた。荒木いよは、ミス・マンを送り届けるためアメリカに発ち、トイスラーの紹介したリッチモンドのオールド・ドミニオン病院で1年研修を行った。その後、他の病院の研修もうけて、明治35（1902）年に帰国した。日本人の看護婦として、荒木イヨが看護教育に主体的に関わったことは、当時としては珍しいケースの一つだったといえる⁷⁾。

大正5年（1920）に聖路加国際病院附属高等看護婦学校が設立され、大正6年に聖路加国際病院という名称が使われることになった。女学校を卒業した人たちを入学させて、アメリカ、あるいはカナダの看護婦学校（修業年限3年）のレベルの教育をはじめた⁸⁾。トイスラーが校長、アリス・C・セントジョンが教育主事となり、アメリカ式の看護学校の設立を開始した。「従来の日本看護婦のサーバントに近い位置から独立の立派な職業」⁹⁾として確立させるためにほかならなかった。

具体的な指導にあたる人物は、アメリカで看護学を学術的、实际的に身につけた、指導力のある人物でなければならなかった。それが、トイスラーの依頼したセントジョンであった。トイスラーは日本の看護婦の教養と社会的地位を、アメリカ並に高くするという大理想をもっていた。まず入学志願者は高等女学校卒業の資格が必要とされた。これまでの日本では、看護婦は小学校卒業で十分

とされていた。トイスラー氏の友人で、学校の評議員であった多数の有識婦人等は、入学資格に高等女学校卒業を要求することは無理であり、失敗に終わるだろうといって、その資格を下げることを進言したがトイスラー氏は頑として、自分の主張をまげなかった。大正9（1920）年の10月の受験者数は80人で、25人を入学許可して、学校の事業ははじめられた。この点は日本の看護学史に於いて、一つの画期的事実と言い得る¹⁰⁾。

開設のはじめから“聖路加”の看護教育が目指してきたものは看護であり、長年の努力の結果、看護学を通常の他の学問と等しい教育レベルに位置付け、学士課程を整備し、大学院において修士、博士のレベルで、看護学を探究することができるようになった¹¹⁾。聖路加は私立では日本ではじめて看護の大学教育を開始できたのである。

看護学校の開設当時、日赤などの一部の先進的な養成を除いては、大半が6ヶ月程度の養成で看護婦とされていたうえ、特に日露戦争後の看護婦の需給バランスの崩れから、看護婦の質の低落傾向になった。明治中期に比較して、大きく異なる点であるといえる。加えて、医師の無理解が根強いマイナス要因であった。彼らは自分中心に治療が行われることが、全く当然であるとして疑わなかった。もし、知的に洗練された女性である看護婦が、患者の状態について、意見でも述べるようなことがあったとしたら、許されないとさえ考えていた。聖路加の看護婦学校の名称は附属となっているが、精神的・実質的には病院と学校は全く独立したものになっていた。アメリカの合理主義、キリスト教的自由に基づいた運営方針をとったといえる。当時最高の規模とレベルを誇っていた日赤看護婦たちは非常な関心をもって、聖路加の動静を見守っていた¹²⁾。後に日赤が専門学校程度の教育を開始する布石にもなった。

学校でのしつけは大変に厳しく、ユニフォームなども、職員のものとは、明確な区別がされていた。セントジョンは服装や態度がだらしないと厳しく注意を与えていたという。その教育ぶりはかなり徹底していた。入学当初27名いた生徒は、卒業時は5名にすぎなかった。一般的に我が国における女子教育や看護教育が“*How to*”的な教育に終始している中で、聖路加の教育では、常に、“*Why?*”が強調されていた。このころから、思考過程を重視した教育だったといえる。

3名の同窓生の声を以下に記した。荒木いよの

時代のもはなく、大正に入ってからのものである。トイスラーの看護婦のレベルアップへ傾けた情熱が伝わっている。

第1回生 河村 郁（大正12年1923卒業）¹³⁾

大正9年（1920）年の秋、教会の宣教師から聖路加病院長が「真の医療は建物設備を整え、良い医師が参加しても、よい看護婦が伴わねば、目的は達成しない」と痛感されて、看護婦学校を創立されるので応募しないかとすすめられた。これまでの私は、看護婦は医師を手伝って病人のお世話をする人だ、ぐらいの、理解しかなく、自分の進学など思いもよらなかった。（中略）学生は全員が和服に袴で、経歴は小学校教員、会社員だった人もあったが、多くは家事従事者で、年齢は、平均で25～26歳、30才近い人もあり、私と他5、6名が20才前後であった。

授業は、医学面は病院の各科医長で、看護面はミセス・セントジョンとミス・ドーンも教務を手伝っておられた。学科課程は後半終戦後にできた保健婦助産婦看護婦養成規則とほとんど同じであった。ミセス・セントジョンの躰は実に厳しいものであった。

第3回生 平井 雅恵（大正14年1925卒）¹⁴⁾

この学校で初めて外国人に会った私は、ミセス・セントジョンが男に見え、威厳のある長身の先生が怖かった。先生から通訳付きで授業をうけたが、時間を守ることに非常に厳しい先生であった。入学当初は着物と袴の生活で、ユニホームを着るようになってから、服装、その他に特に厳しかった。姿勢を正しくすること、髪のみだれに気をつけること、清潔に注意すること、等々。院長トイスラー先生は、日本の看護婦のレベル・アップと公衆衛生の発展に特に力を注がれた。

第6回生 金子 光（昭和3年1928卒）¹⁵⁾

看護の専門教育を受ける一般基礎教育は、高等学校卒業でなければならないという現在の常識は、70年前の創始当時すでに、行われていた。70年の歩みを辿ってみれば、創立当時のトイスラー先生による、思い切った教育水準はついに日本で初の博士課程を誕生させた進展ぶりは、他の看護大学の大きな励みになっており、常に看護教育の先端を歩むものであった。

■ 草創期の看護教育の傾向と教育観

1. 三つの流れ

杉森みどりによると、わが国の看護教育には、二つの大きな傾向が見られる¹⁾。一つはお雇い外国人の直接指導のもとに、始められたことである。これは、同志社京都看病婦学校のリング・リチャーズ、慈恵のリード、桜井女学校のヴェッチ、時期は遅れるが聖路加はセントジョンのことである。もう一方は、ナイチンゲール看護の直輸入型教育を初代教育者の離任とともに、医師が受け継ぎ、日本流に変質した医師による医師の助手としての看護婦養成である。これは帝国大学の時にヴェッチが関与したことをさしている。

日赤はそのどちらにも入らない。日赤はドイツからの指導者を考えていたが、それは実現せず、陸軍の医師たちによって、皇室の庇護のもとに教育された。戦時救護および災害救護時の看護婦養成という方針があった。そのようなことから、草創期の看護教育には3つの流れがあるといえる。

2. 3人の外国人教師

同志社京都看病婦学校のリング・リチャーズ、慈恵のリード、桜井女学校のヴェッチの三人が看護婦養成にかかわった。

来日した動機をくらべると、リング・リチャーズはアメリカで実際に看護学校の校長として活躍していた。前に述べたように、「リチャーズは日本に近代看護の種をまくために、わざわざ学校長の要職を自ら退いて、一人のキリスト教徒として来日した」¹⁾ということだった。

リードはキリスト教の宣教師として来日していたところ、高木兼寛に依頼されて、2年の契約で指導にあたった。

ヴェッチは日本の観光目的で来日していたところを、桜井女学校と帝国大学に1年間指導に関わっている。

それぞれの関わり方は、最初から大分異なっていた。本当に教育を目的にして、来日したのは、リング・リチャーズだけであった。初めての西洋式看護教育には、大分ばらつきがあったと思われる。リードとヴェッチは最初から、短期間の指導であったが、当時の病院に衝撃を与えたと考えられる。

京都看病婦学校の宣教医ベリーによると、「わが国で働いていた看病婦は其給金も極めて廉なる

老婆を雇い入れて病院内の掃除其他院中の賤業をなさしめ、追々病院の事を見習い覚ゆるにいたり、若し看病婦の中に不足などあれば、之を挙げて用いて、看病婦となす程度であった。こうして、にわかにできあがった、無知な看病婦は、怠慢で、夜中居眠りしている間に患者がベッドから転落して死亡するなどのひどい状態であった。』²⁾

帝大病院で、アメリカの看護婦のように看病婦見習生がナイチンゲールの教育方針で実習したときの周りの驚きようが推察される。キリスト教精神の人間愛や慈愛をもって、看護したとすれば、患者からは、感謝されたに違いない。そして、患者のことは全て医師が思うように進めていた所にあらわれた主体的に看護するアメリカ式の看護婦がうるさい目でみられたことも、想像にかたくない。

3人の外国人指導者は、看護婦養成に西洋のキリスト教精神のヒューマニズムを導入するさきがけとなった。興味深いことに、そのいずれもが、そのはじめは英米のナイチンゲール方式による看護婦養成を模倣したものであった。それまでに日本に存在した格別の訓練をうけない多くの看護婦を無視して、全くの新しいスタートラインにたったのである。その直輸入的な外人指導者による初期の養成は数こそすくないが、質は高く、当時としては女教師以上に時代の先端をゆく、エリートの近代職業の一つであった。

3. 各養成所の特色とその発展と挫折¹⁾

明治17(1884)年から23(1890)年にかけて、同じように近代看護を導入しようとした5つの養成所(慈恵・同志社・桜井・帝大・日赤)がそれぞれ異なった目的と特色をもち、それゆえに、発展したり、挫折して、跡形もなくなったりしている。

慈恵・帝大・日本赤十字社の養成が80年後の今日まで、継続発展しえたのは、偶然のことではなく、慈恵は上流富裕階級と皇室の援助があり、帝大には官立としての権威と保護が、日本赤十字社には皇室と軍部の背景があった。そこには看護の本質から離れた、弱点をそれぞれ抱えていたと考えられる。

これらに比べて、キリスト教主義の中にあった同志社と桜井の養成は、外人指導者の影響下にあつて、ナイチンゲール方式をそのまま採用した。この精神とは、看護婦はどこまでも看護婦であつて、医師でもなければ、その助手でもない。看護婦の

すべてのことは自らの手で行い、看護婦の職業的自由、経済的、精神的独立を確立しようとするものであった。それゆえに、この二つの養成所が教育内容において、より近代的なすぐれたものを持ちながら、日本の社会に根をおろしにくかったと考えられる。この挫折の原因は、外面的には体制側からのキリスト教教育機関への圧迫や、社会的風潮としての、国家主義的軍国主義が台頭したこと、外国からの援助資金の打ち切りなどがあるが、内面的には、ナイチンゲール制度そのものが、戦前の医療制度の中に組み込まれえない本質をもっていたと考えられる。桜井や同志社の卒業生の実践活動は天皇制や軍部や、富豪や、官立としての権威からの自由であった。キリスト教の制約があったとは言え、深い人間愛に根ざしたものであった。貧しいもの、病に悩むものに主体性をもって、近づこうとしていた。

帝大の看護婦養成でも最初は桜井女学校と同じ外人看護婦教師を1年雇っていた。しかし、医師の教育に中心をおいた、官立の帝大病院では、看護そのものもいつのまにか、入院患者の病床から、医師の診断治療の介助に移して、その人間関係にまで、従属性を持ち込み、看護婦はそうした特権的な医師の威をかりて、患者に命令口調でのぞむような病院看護婦の一つの典型まで生むことになった。東大では外人看護婦教師が去ったあと、昭和25(1950)年まで、50回生卒業まで、医師による教育がされ、看護婦の教員は一人もいなかった。

また、戦時救護・災害救護を目的として、看護婦養成をした日本赤十字社では、皇室と軍部の保護を背景に天皇制絶対主義と軍国主義の一翼をにないつつ、くりかえされる戦争によって発展していった。

■ まとめ

近代看護教育の草創期について、以下のように考える。

1. 西洋看護教育(ナイチンゲール方式)の導入が初めての看護婦養成であった。
2. 西洋文明を取り入れようとしていた明治時代の社会状況と重なっていた。
3. 軍部や皇室の配下のもとで、戦病者の看護を目的に看護婦養成をされたことがある。
4. 官立は医師養成が中心となり、医師による看護教育が主流だった。

5. 西洋看護教育はキリスト教の宣教を伴っていたため、政府のキリスト教廃止の風潮が強くなるなかで衰退した。
6. キリスト教が認められるようになると、西洋看護教育は目覚しく発展した。
7. 西洋看護教育には、当時日本に欠けていた患者へのヒューマニティがあった。
8. 厳しい訓練や、作法、しつけがされた。
9. ナイチンゲール方式は看護教育の主体性を挙げていたが、日本には根付かなかった。

始された。その導入にあたっては、看護に理解を示す先進的な医師たちの大きな力があつたことも事実である。草創期の教育観として、当初は西洋の看護教育を目指していたが、その後、看護婦ではなく医師による看護教育に変化した。そのような中でも、看護の質を向上させようとする教育観が看護教育を発展させて、現代に至っている。今後も看護教育が社会状況からどのような影響をうけて発展してきたのか、その看護教育史に関心をむけたい。

■ おわりに

日本の近代看護教育は、ナイチンゲール方式の教育を受けた外国人看護婦の教師達によって、開

付記 本論文は平成13年11月に慶応義塾大学通信教育部の卒業論文として提出したものに加筆修正したものである。

引用文献・参考文献

■ 日本における近代看護教育の導入と草創期

- 1) 亀山美知子著 『近代日本看護史Ⅳ 看護婦と医師』 p.85 ドメス出版 1997年
- 2) 土曜会歴史部会 高橋政子ら篇 『日本近代看護の夜明け』 p.3 医学書院 2000
- 3) 2) に同じ p.133
- 4) 2) に同じ p.7
- 5) 4) に同じ
- 6) 鈴木俊作著 『ナースのための教育学』 p.59 看護の科学社 1996
なお鈴木は東京大学教育学科卒業の教育学者である。
- 7) 亀井美知子著 『近代日本看護史Ⅲ 宗教と看護』 p.113 ドメス出版 1979

■ 草創期の各看護婦養成所の教育状況

1. 有志共立東京病院看護婦教育所と高木兼寛医師

- 1) 本章は、主に 『慈恵看護教育百年史』 東京慈恵会発行 昭和59年を参考にした。
- 2) 山川捨松：1871（明治4）年、津田梅子らと共に、女子留学生第1号として渡米。ヴァーサ・カレッジ卒業後、1882（明治15）年、コネチカット看護婦学校に2カ月入学、同年帰国。その後陸軍卿の大山巖と結婚した時点で、高木兼寛の看護婦養成に協力することになった。山川捨松は自分が所属する貴婦人たちの慈善団体に働きかけて、資金集めを積極的に行なった。これは鹿鳴館の舞踏会などと共に行なわれた慈善バザーであった。合衆国長老教会の宣教師に任命されたこともある。
亀井美知子著 「看護史 新版看護学全書別巻7」 pp.98-99 メディカルフレンド社 平成5年
- 3) 『慈恵看護教育百年史』 p.23 東京慈恵会発行 昭和59年
- 4) 『看護婦人矯風会雑誌』 第19号 明治36年
- 5) 3) に同じ p.29
- 6) 3) に同じ p.75
- 7) 土曜会歴史部会 高橋政子ら篇 『日本近代看護の夜明け』 pp.20-21 医学書院 2000
- 8) 3) に同じ p.419
- 9) 3) に同じ p.69

2. 京都看病婦学校と新島譲

- 1) 本章は主に亀井美知子著 『近代日本看護史Ⅲ 宗教と看護』 pp.71-129 ドメス出版 1997 を参

考にした

- 2) 本章は主に土曜会歴史部会『日本近代看護の夜明け』 pp.29-54 医学書院 2000 を参考にした
- 3) 1875(明治8)年、新島譲は山本覚馬とキリスト教主義の私塾「同志社」を結社し、社長となった。アメリカ伝道会から資金援助を受けていた。最初は英学校であったが、「同志社」を将来的には総合大学にするという構想をもっていた。
- 4) 1) に同じ p.125
- 5) 1) に同じ p.84
- 6) 1) に同じ p.80
- 7) 2) に同じ p.40
- 8) 1) に同じ p.125
- 9) 2) に同じ p.54
- 10) 2) に同じ p.54

3. 桜井女学校付属看護婦養成所と創設者ツルー

- 1) 本章は主に亀井美知子著『近代日本看護史Ⅲ 宗教と看護』 pp.37-70 ドメス出版 を参考にした
- 2) 本章は主に土曜会歴史部会『日本近代看護の夜明け』 pp.56-96 医学書院 2000 を参考にした
- 3) 桜井ちか(1855-1928) 亀井美知子は「ちか」ではなく「ちか子」としている。明治5年ころに英学塾の芳英社という女学校で学び、その後、プレスビテリアン教会派の牧師タムソンに英語をならった。明治7年に新栄教会で彼から洗礼を受け、キリスト教徒になった。その後23歳で桜井女学校を設立した。
- 4) ツルー(1841-1896) ツルーの夫は牧師をしていたが、結核で他界し、その後、ツルー婦人が宣教を続けていた。日本への伝道は夫婦の夢であった。
胃潰瘍が持病となり、明治29年4月18日、55歳をもって、日本の地で永眠した。青山外人墓地に葬られている。
- 5) 築地に明治6年にプレスビテリアン教会婦人伝道局所属のパイク(牧師タムソンの妻)とヨングメンという二人の女性により、B六番女学校が設立された。この女学校が明治10年に新栄町に移転し、新栄女学校となった。
- 6) 2) に同じ p.64
- 7) 1) に同じ p.42 中里龍瑛『日本看護史』では8人としているが、卒業生の大関和は『毎日電報』明治40年1月31日の中で7人としているため、入学時の生徒数は確定が出来にくい。
- 8) 1) に同じ p.42
- 9) 亀井美知子著『近代日本看護史Ⅳ 看護婦と医師』 p.120 ドメス出版 1997
- 10) 同上 p.85
従来看護婦とは明治33(1900)年の「東京府令71号 看護婦規則」制定前における未教育のまま業務に従事する看護婦をさす。日本赤十字社は、明治20年前後に相次いで誕生した近代的看護婦以外の看護婦と呼ばれた女性たちを従来看護婦と呼んでいる。
- 11) 1) に同じ p.45
- 12) 1) に同じ pp.45-46
- 13) 2) に同じ p.69
- 14) 高田みつ子著「桜井女学校の誕生とマリア・T・ツルーと矢嶋楯子」看護教育27・7 p.446 1986-6

4. 初めての官立看護教育—帝国医科大学看護婦養成

- 1) 鈴木一子「今、あらためて看護教育の歴史を考える」看護歴史学会誌 第8号 p.13 1995 日本看護歴史学会編集
- 2) 土曜会歴史部会著「日本近代看護の夜明け」 p.100 医学書院 2000
- 3) 『看護教育108年のあゆみ』 p.47 東京大学医学部附属看護学校45周年記念誌出版会 平成7年発行
明治21年に看病婦と言っていたが、明治42年に帝大は看護婦に名称変更した。

- 4) 2) に同じ p.102
- 5) 2) に同じ p.107
- 6) 2) に同じ p.105
- 7) 2) に同じ p.119
- 8) 2) に同じ p.103

5. 戦時救護と日本赤十字社看護教育のはじまり

- 1) 土曜会歴史部会著 『日本近代看護の夜明け』 p.147 医学書院 2000
- 2) 吉川龍子著 「佐野常民の生涯と赤十字看護教育の創始」 看護歴史学会誌 第6号 p.19 1993
日本看護歴史学会編集
- 3) 2) に同じ pp.21-22
- 4) 1) に同じ p.168
- 5) 講師は陸軍一等軍医が嘱託された。日本赤十字篤志看護婦人会規約の第1条には戦時軍人患者ノ看護法を研究スルモノトス。とある。毎月2回の講義で1年間のコースであった。皇室関係の貴婦人が参加した学習会であり、実際の看護活動はしない。
- 6) 亀山美知子著 『近代日本看護史Ⅰ 日本赤十字社と看護』 pp.38-39 ドメス出版 1997
- 7) 1) に同じ p.173
- 8) 2) に同じ p.27
- 9) 1) に同じ p.219
監督とは看護婦の監督をする管理職であり、婦長と同じ意味である。初代監督は高山盈子、2代目は加藤梢、3代目は加藤まさ、荻原タケが4代目の監督になった。初代監督は取締りという名称であった。
- 10) 1) に同じ pp.224-225
- 11) 同上 pp.224-225
- 12) 桥居 孝 「世界と日本の赤十字」 タイムス社 1999
- 13) 「写真日本赤十字看護教育のあゆみ 記録博愛社から日赤中央女子短大まで」 日赤中央女子短大史研究会 昭和63年
- 14) 吉川龍子 「日本の創造力」 第1巻ー日本赤十字社の初代社長佐野常民ー日本放送出版会 1992

6. アメリカの看護教育の水準を導入した聖路加看護教育

- 1) 聖公会はイギリス国教会として、キリスト教のプロテスタントに入っている。
- 2) トイスラー (Rudolf Bolling Teusler 1876-1934) 24才で来日。アメリカのリッチモンドで医師をしていた。日本で宣教医をさがしている話を耳にして、アメリカ聖公会に志願した。
- 3) 亀山美知子著 『近代日本看護史Ⅲ 宗教と看護』 p.136 ドメス出版 1997
- 4) アメリカ式とは、トイスラーと指導者荒木いよがアメリカで研修をうけて看護婦養成をしている為、その教育内容を表現している。トイスラーは早くからアメリカ式の看護学校を設立したいと考えていた。
- 5) 3) に同じ p.136
- 6) 3) に同じ p.137
- 7) 3) に同じ pp.192-197
- 8) 聖路加女子専門学校卒業生 吉田時子 「今、あらためて看護教育の歴史を考える」 看護歴史学会誌 第9号 p.116 1996 日本看護歴史学会編集
- 9) 3) に同じ p.148
- 10) 中村徳吉著 『ルドルフ・ボリング・トイスラー小伝』 pp.40-41 聖路加病院発行 昭和60年
- 11) 『聖路加看護大学の70年』 p.13 聖路加看護大学発行 平成2年
- 12) 3) に同じ p.152
- 13) 11) に同じ p.171
- 14) 11) に同じ p.172

15) 11) に同じ p.9

■ 草創期の看護教育の傾向と教育観

1. 三つの流れ

- 1) 杉森みど里 『看護と看護教育の歴史的検討ーわが国における看護婦養成教育の変遷』 教育と医学 第41巻第3号通巻477号 平成5年3月 慶応通信

2. 3人の外国人教師

- 1) 土曜会歴史部会著 『日本近代看護の夜明け』 p.35 医学書院 2000
- 2) 亀井美知子著 『近代日本看護史Ⅲ 宗教と看護』 p.77 ドメス出版 1997

3. 各養成所の特色とその発展と挫折

- 1) 土曜会歴史部会著 『日本近代看護の夜明け』 pp.134-136 医学書院 2000

英文抄録

EDUCATIONAL PHILOSOPHY in the PIONEERING DAYS of NURSES' TRAINING in JAPAN

Yûko Tsuda

Modern training of nurses in Japan commences with the appearance of the qualified nurse following the introduction of modern nursing as a profession along the lines developed by Florence Nightingale. This may be characterised as the introduction of Western-style nurses' training by the Nightingale method. The pioneering days of nursing in Japan thus begin in 1885 and continue throughout most of the last decade of the nineteenth century. The present paper concentrates on six schools, namely *Yûshi Kyôritsu Tôkyô Byôin Kangofu Kyôikusho* [Yûshi Kyôritsu Tokyo Hospital Nurses' Training Institute], *Kyôto Kangofu Gakkô* [Kyoto Nurses' School], *Sakurai Jogakkô Kangofu Yôseisho* [Sakurai Girls' School Nurses' Training Institute], *Teikoku Daigaku Fuzoku Kanbyôhō Renshûka* [Imperial University Nursing Practice Department], *Nihon Sekijûjisha Kangofu Yôseisho* [Japan Red Cross Nurses' Training Institute] and *Sei Ruka Byôin Kôtô Kangofu Yôseisho* [St Luke's Hospital Higher Nurses' Training Institute]. It sifts through materials on the people who contributed to the pioneering days of modern nurses' training in Japan and listens to the voices of the young women who were trained in these schools in an attempt to build up a picture of the educational philosophy of the age.

Key Words: Trained Nurse, Western-style nurses' training, Teacher from foreign country